



あらすじ
コミック 1

愛知県新城市出身の伸（シン）は、有名な橋の建築家になることを夢見て、スイスのノイエンプルグ(Neuenburg)という町で建築学を勉強しています。ノイエンプルグは「新しい城」という意味。それで、ノイエンプルグと新城市とは、2002年にスイスでEXPOが開催されたときに姉妹都市になったのです。

ある日、ノイエンプルグ湖にかかる橋の上から、湖を泳いでいる奇妙なものを見つけた伸は、急いで友達のプーキームーとツヴィルベルにそのことを知らせます。三人がかりで湖からすくいあげてみると、それは、いままで見たこともない金色の魚。「ぼくは、日本から来たシャチホコの魚です。火事にならないようにお城の屋根から見張っているのがぼくの仕事なんだ。だからぼくはどうしても日本に帰らなくちゃいけないんです。どうか助けてください！」と、金色のシャチホコ君が言います。

そういうときに頼りになるのはツヴィルベルしかいません。さっそく日本までシャチホコ君のお供をすることにします。スイスに残る伸とプーキームーにさよならを言って、いざ出発。長い旅路を前にしたツヴィルベルとシャチホコ君は、車掌をしているディアネといっしょに電車に乗れてうれしそうです。

ベルンのグラスブルネン (Glasbrunnen) では、ベルンのシンボルが熊だからでしょうか、シャチホコ君の頭がなんと熊に変身してしまいます。そこで、ツヴィルベルとベアフィッシュ(熊魚)ならぬシャチホコ君は、熊の友人たちに会うべく、ベルン市内の熊公園へ。夜になると、ツヴィルベルの親友、小熊座くんがやって来て、チューリヒで開催されるテディベアのお祭り、テディパレードのことを話します。さっそく、みんなで星の帽子に乗ってチューリヒへ。勢いあまって帽子から飛び降りてしまったシャチホコ君でしたが、運良くハイジに受けとめてもらって一安心です。さあ、チューリヒでは、たくさんの愉快的な体験がみんなを待っています。

楽しいひとときのあと、ハイジもいっしょに日本に行く決心をしますが、ツヴィルベルはその前にどうしてもロイク(Leuk)に行つて両親にお別れしたいと言います。途中、ディアナも仲間に加わって、電車は、ヴァリス州に抜ける旧ロツチュベルグトンネル(Lötschberg tunnel)を走ります。一行は、ゴッペンシュタイン(Goppenstein)にあるロツチの軽食店で一休み。最近、ほとんどの観光客が新しいトンネルを通るので、商売があがったりだとロツチは嘆息しますが、ツヴィルベルは「まあ、ロツチ、あなたとロツチェンタール(Lötschental)を知っている人なら、絶対に旧トンネルの方を通してあなたのお店に来るわ。」と言ってなぐさめます。さて、ロイクでは、ツヴィルベル、シャチホコ君、ハイジの三人を海まで乗せて行くために、ジャンツォが気球で着陸。一行を乗せた気球は、まずロイク城のガラスドームを眼下に望み、まもなくマッターホルンを過ぎて、イタリアに向かいます。

イタリアの海岸に着くと、ヴィルベルトという名前のブタの友人が、ツヴィルベルとハイジがうまく泳げるように、魔法で尾ひれを付けてあげ、それから一行は海でたくさんの冒険をすることになります。

ついに日本沿岸に到着した一行は、風変わりな旅行者たちを珍しがって集まってきた、たくさんのシャチホコの魚たちと、赤ベコたちの出迎えを受けます。そして、それまで頭が熊になったままだったシャチホコ君は、日本で不思議な泉に飛び込んで、またもとの金色のシャチホコの姿に戻ります。

今日、八月一日はスイスの建国記念日。スイス連邦とツヴィルベルがいっしょに誕生日をむかえ、日本側のホストは盛大な歓迎パーティの準備をしてくれています。それに、日本でもおなじみのハイジはまるで大スター……。